

マフディー運動の史的再検討
—19世紀エジプト領スーダンにおける
「奴隷交易問題」の分析を通じて—

栗田 禎子

The Sudanese Mahdīya: A Historical Reappraisal
through an Analysis of the “Slave Trade Problem”
in the Egyptian Sudan in the Nineteenth Century

KURITA, Yoshiko

University of Tokyo, Graduate School

序論		の展開過程
第一章 従来の評価		第一節 1821年征服のインパクト
第二章 分析の観点: 「奴隷交易問題」分析の問題点と意義		第二節 ナイル河谷支配の展開と「河の民」
本論		第三節 ダール・フルの変質と Jallāba
第一章 マフディー運動における諸集団の結集と統合		第四節 バフル・アル・ガザールの「奴隷狩り」帝国
第二章 エジプト領スーダンにおける支配		第三章 エジプト領スーダンの解放

序 論

を分析・再検討し、若干の考察を加えることにある。

第一章 従来の評価

マフディー運動については、すでにその勃発以来、さまざまな立場にある人々が発言してきているが、それが一応「現代史」の問題ではなくなってから¹⁾の人々の発言一言一換

本稿の目的は、19世紀末にエジプト領スーダンで展開したマフディー運動の歴史的背景

1) 後述するように、マフディー運動はその後のスーダン史の枠組を決定し、間接的には現在のスーダン共和国の政治構造を深く規定する要因にすらなっているの、広義のマフディー運動は依然現代史の問題である。だが、1881年にエジプト領スーダンの支配構造を打ち破るものとして発生し、以後18年間続くことになるマフディー運動と、20世紀に入ってから英統治の下で人工的に再建されたマフディー運動(むしろマフディー体制と言うべきか?)との間には根本的な断絶があると思われるので、ここでは19世紀末に解放運動として機能した、狭義のマフディー運動のみを論考の対象としたい。狭義のマフディー運動の本質を理解することが、現代史の問題としての「マフディー体制」の意味を理解し、両者の間の連続性と断絶を把握するためにも、まず不可欠と考えられるからである。現在のスーダンにおいてマフディー体制が持つ意味については、藤田 進「スーダン」『中東ハンドブック』講談社、1978年、pp. 133-139 に的確な記述が見られる。また、1985年4月以降の状況については拙稿「5月」のあとで—スマイリー体制崩壊後のスーダンの政治状況についての覚書』『日本中東学会年報』No. 2, 1987年、pp. 53-74 参照。

えれば、当事者ではなく研究者の範疇に入れられるような人々の発言—についてだけでも振り返ってみると、マフディー運動の全体像に対する評価は大きく三つに分類できることがわかる。第一は、きわめて早い段階でいわゆる「世界分割」を阻止・規定し、帝国主義に大きな打撃を与えた運動、という肯定的評価である。日本の研究者はほとんどみなこの派に属すると言ってよい²⁾。第二は—第一の評価の裏返しとも言えるが—ムハンマド・アリー朝が60年間にわたって営々と築き上げてきた文明化の事業をぶちこわしにした蛮行、一つの「破局」ととらえる否定的評価である。この代表的な例は、主として1952年革命以前のエジプトで活躍したムハンマド・フアード・シュクリー Muḥammad Fu'ād Shukrī に見ることができる。また、シュクリーほどムハンマド・アリー朝一辺倒ではないが、やはりマフディー運動を一つの開発事業の挫折として否定的にとらえる者にグレー Richard Gray がいる³⁾。第三は、第一、第二の折衷式を採るもので、マフディー運動を一つの反乱のエピソードとして一見「客観的」ととらえ、反乱の諸原因を列挙しその展開を淡々と叙述していくやり方であり、これはホルト P. M. Holt に典型的に見られる⁴⁾。

今、この三方向の研究の成果を見比べてみると、第一の派には、おそらく問題の本質を突いてはいるが、世界分割を阻止し帝国主義に打撃を与えるに至ったという、その運動を生じせしめた社会の内部構造・矛盾についての分析が、著しく不足しているという弱点がある。確かにマフディー運動はまずエジプト、ついでイギリスと戦い、最後にはイタリア、ベルギー、フランスなどと戦いながら満

身創痍になって懐滅した華々しく劇的な運動であり、「世界分割阻止の砦」としての面が一番目につくことは否定できない。だが、そのような運動を引き起こすに至ったエジプト領スーダンの内的矛盾—言い換えれば、エジプト領スーダン内部で帝国主義がどのような形をとって現われたか—の分析をおろそかにして、外敵を撃退した点ばかり称賛していてもあまり意味はないと思われる。「帝国主義をたまたま、結果的に撃退しただけで、運動の当初の性格は異なったレベルのものだったのではないか」という反論が一たとえばホルトなどから一出された場合に、有効な論駁ができないのである。また、これでは、「帝国主義」という言葉を非常に狭く—1884~85年を契機とする世界分割の時期に—限定してしまう立場に陥る危険性も出て来る。

第二の派について言えば、ここでは「文明化」の事業の内実、「開発」がその地域の民衆にとって何を意味するものだったのかが、厳しく問い直されねばならないことは明らかである。反面、この派の研究者は「文明化」「開発」の過程を—「文明化」「開発」する側の立場に立ってではあるが—かなり詳細に追っているため、彼らの研究の成果は、我々の問題意識に視座を置き換えて見直しさえすれば、示唆的であることも多い。つまりこの派の研究は、第一の派の弱点を補い、19世紀末のエジプト領スーダンの民衆にとって帝国主義的支配がどのような構造をとって現われていたのかを、照射するのに用いることが可能である。

第三の派は、一見客観的ではあるが、これもまた危険な陥穿の縁に立っていると言うことができる。この派の論者によるマフディー

2) 岡倉登志「スーダンにおけるマフディー運動(1881-98)とその意義」『人文科学研究所紀要』立命館大学, No. 28, 1979, pp. 111-133; 板垣雄三「世界分割と植民地支配」『岩波講座世界歴史・近代9・帝国主義時代 I』岩波書店, 1969, pp. 135-152.

3) Muḥammad Fuwad Shukry, *The Khedive Ismail and Slavery in the Sudan*, Cairo, 1938; R. Gray, *A History of the Southern Sudan, 1839-1889*, Oxford, 1961.

4) P. M. Holt, *The Mahdist State in the Sudan 1881-1898* (2nd ed.), Oxford Univ. Press, 1977.

運動の記述は、全体に、「一つの無能な統治に対する一つの暴力的な反乱」の過程を淡々と描写する、という形態をとりがちである。そこではエジプト当局の数々の失政が指摘され、それに対する反乱の素地を成したエジプト領スーダンの部族組織・教団組織・信仰の形態等が描かれる。そして、反乱の結果一個の国家が成立し、行政機構が整備され、それは典型的なイスラム君主国への道を歩んでいたのだが、ちょうどこの時期アフリカのこの地域にはヨーロッパ帝国主義列強が進出して来るところだったため、そのような国家の生存は許されず、それは滅亡せざるを得なかった、という結論で終わる⁵⁾。この種の研究の特徴は、マフディー国家末期の部分になって突然帝国主義が出て来るところ一言い換えれば、マフディー運動勃発までの過程は完全にエジプト＝スーダン間の失政→不満の爆発の図式で説明され、エジプト領スーダンの支配構造が単層的に描かれるところにある。その支配構造自体を包摂していた、さらに大きな時代の構造の特殊性は見えて来ず、マフディー運動は無能な統治者と狂暴な民衆がいさえすれば時空を越えて起こり得る、一般的反乱の一つとして描かれてしまう。

以上の概観から明らかなように、これら三学説は、より堅固な構造を持った一個の学説へと再構築されなければならない。すなわち、マフディー運動の担い手たち—19世紀末期のエジプト領スーダンの民衆—が置かれていた状況が構造的に描かれ、その状況の克服のプロセスがそのまま「世界分割」を阻止する力ともなり得た必然が明らかにされなければならない。「分割」期になって突如闖入してくる外敵としての帝国主義ではなく、民衆

をその日々の生活の場の中でとりこんでしまっていた帝国主義、支配に対する闘いが、そのまま自己変革の闘いでもなければならなかった⁶⁾、そうした支配の構造が解明されなければならないと考えられる。

第二章 分析の観点: 「奴隷交易問題」分析の問題点と意義

では、ムハンマド・アリー朝エジプトによるスーダン支配の構造、その中に置かれた民衆の状況、そこに生じた矛盾を解明していく上で、分析の糸口として用い得るのは何だろうか。さまざまな次元からの接近が考えられるが、本稿ではいわゆる「奴隷交易問題」(この問題設定の含意についてはすぐあとで議論する)を導きの糸として用いていくことにする。

さて、マフディー運動の背景を「奴隷交易問題」の観点から分析することには以下のような点で重大な危険性につきまとうため、その危険性を意識し、克服することによって、積極的意義へと転化させることが必要である。

①エジプト領スーダンの民衆に対する支配に加担していた人々、マフディー国家成立後はその撃破をめざすようになった人々の視点に同化される危険性⁷⁾。当時の(ヨーロッパを中心に編成された)「国際社会」の風潮を反映して、スーダンに対するエジプトの支配の強化・拡大は(特にマフディー運動直前のヘディーヴ・イスマール期)「奴隷交易撲滅」を旗印に進められた。支配は奴隷交易の撲滅と文明の普及という美名のもとに正当化され、それに対するすべての抵抗は「奴隷商人の反乱」と形容される傾向があった⁸⁾。また、「奴隷交易撲滅」はイギリスを初めと

5) *Ibid.*, p. 266.

6) 本稿本論第三章参照。

7) こうした危険性を警戒して、たとえば現代スーダンの歴史家 Makkī Shibayka は、奴隷交易禁圧はマフディー運動発生の一つの原因ではあるが「主要な原因では断じてない」と強調している。Makkī Shibayka, *Ta'rikh Shu'ūb Wādī al-Nīl*, Bairūt, 1965.

8) ダール・フル、アビシニアとの戦争、上ナイルへの進出、紅海岸～ソマリに対する主権の主張等は、すべて奴隷交易撲滅をスローガンとして行なわれた。M. F. Shukry, *op. cit.*, 参照。

するヨーロッパ諸国がエジプトのスーダン統治機構の中に多数の自国民を送りこむ口実となり⁹⁾、1882年のエジプト占領後、特に90年代に入ってからは、イギリスによってスーダン征服の口実として用いられるようになった¹⁰⁾。

② (①の問題点と関連するが) 「イスラムの教義では奴隸制も奴隸交易も容認されている」としてイスラムと奴隸制を過度に結びつけて論じたがる、ヨーロッパ人の伝統的論法¹¹⁾に引きずられる危険性。このような論法は、マフディー運動は「イスラムの風習を無視したキリスト教徒に対するムスリムの闘争」、つまりは「反キリスト教徒運動」だったのだ、と規定することにつながり、マフディー国家とアビシニアとの戦争を「ムスリムとキリスト教徒の、避け難い闘争」と解釈する方向¹²⁾にまで連なっていく可能性がある。また、このような論法は、「北部ムスリムの奴隸商人が南部の非ムスリムを奴隸化した」ことをもって現在のスーダン共和国内における南北対立の原因とするような短絡的な態度にもつながり、過去においては南北対立の煽動(あるいは問題の真の所在の隠蔽)に利用されてきた経緯もある¹³⁾。

だが、いったん上記の危険性を意識した上

で19世紀エジプト領スーダンの「奴隸交易問題」に関する膨大な史料に取り組めば、逆に我々は、「奴隸交易撲滅」の名において支配した人々によって「奴隸交易」と一括して描写された情景の中に、当時のスーダンの民衆が置かれていた状況のさまざまな局面を読みとることができるようになる。「奴隸交易問題」分析の積極的意義は本論の中でおのずから明らかになるはずであるのでここでは手短かに述べるにとどめるが、要点は以下の通りである。第一に、ムハンマド・アリー朝は最初は奴隸を求めてスーダンに進出、奴隸交易に積極的に参与し、のちには逆に「奴隸交易撲滅」をスローガンに支配を強化・拡大していった。また、「奴隸交易撲滅」はヨーロッパ帝国主義の、エジプト領スーダンへの干渉の口実でもあった。それゆえ、「奴隸交易問題」に着目することによって、ムハンマド・アリー朝のアフリカ帝国建設・支配の進展、「近代化」や「文明」がスーダンに入りこんでいく過程を把握することができる。第二に、その過程で登場するさまざまな「奴隸商人」たち、その「奴隸商人」たちとエジプト当局(そしてその背後のヨーロッパ)との間に生じる協力・競合・闘争に注目することによって、ムハンマド・アリー朝の支配の構造、そ

9) 英における「奴隸交易撲滅」キャンペーンの中心的存在であった British and Foreign Anti-Slavery Society の活動については、Abbas Ibrahim Muhammad Ali, *The British, the Slave Trade and Slavery in the Sudan, 1821-1881*, Khartoum, 1972, に詳しい。

10) 英はマフディー国家体制下では奴隸交易が栄えているという見解をとり、これをスーダン征服準備の口実とした。F. R. Wingate, *Mahdism and the Egyptian Sudan* (2nd ed.), London, 1968, p. 478-497; Lord Cromer, *Modern Egypt*, London, 1906, Vol. II, Chap. LX 等。

11) たとえば British and Foreign Anti-Slaver Society はこのタイプの議論を展開していた。Abbas Ibrahim Muhammad Ali, *op. cit.*, pp. 67-70.

12) 岡倉登志「ファッションダ事件前夜の国際関係—帝国主義研究の方法に関連して—」『アジア・アフリカ研究』No. 242, 1981, pp. 5-17, も、マフディー国家がアビシニアと戦った第一の原因を「この国がキリスト教国であること」(p. 12)としている。

13) Mohammed Omer Beshir, *The Southern Sudan: Background to Conflict*, Khartoum, 1979, p. 22; Francis Mading Deng, *Dynamics of Identification: A Basis for National Integration in the Sudan*, Khartoum, 1973, p. 29. スーダンで「奴隸制」を議論することがいかにデリケートな問題であるかは、1987年に「スーダンには現在も奴隸狩り、奴隸交易が存在する」と主張する小冊子を発表したハルツーム大講師 Dr. 'Ushari Ahmad Mahmūd が、同年末、南部に基盤を持つ反政府組織「スーダン人民解放軍」(SPLA) と内通しているとの容疑で逮捕された一例からも窺われる。

の中に取りこまれていったスーダンの人々の姿に光を当てることができる。そして支配の展開の中で人々の分裂・連帯が、次第に広い地域を巻きこみつつ進んで行く過程を明らかにすることができる。第三に、上記の過程の一つの帰結として、「奴隷狩り・奴隷交易」を中心に一個の共同体が形成され、そこで従来では考えられなかったような形のアイデンティティ形成がなされる場合があったことが、近年のコーデル D. D. Cordell によるダール・アル・クティ Dār al-Kuti の研究¹⁴⁾などから明らかになりつつある。これはマフディー運動よりはむしろ、同じくエジプト領スーダンに端を発し、のちにチャドで全面展開したラービフ・ファドル・アッラーフ Rābiḥ Faḍl Allāh の運動¹⁵⁾の方により色濃くつながっていく連帯の論理であるが、その原型は1860年代後半～1870年代にエジプト領スーダンのバフル・アル・ガザール Baḥr al-Ghazāl 地方で、有名な「奴隷商人」アッ・ズバイル・ラフマ・マンズール al-Zubayr Raḥma Maṣūūr のもとで成立していた。スーダンの「奴隷交易」のこの側面を検討することによって我々は、19世紀末北アフリカの二つの代表的解放運動、マフディー運動とラービフの運動との間の失われた環の復元を試みることができるのである。バフル・アル・ガザールで成立したこのような状況—「奴隷交易」を契機とした新しいアイデンティティ形成—を分析することは、マフディー運動がエジプトのオラ

ービー革命とチャドのラービフの運動という異なった二運動の双方と共通点を有しつつ、なおかつ全く独自の運動として結実した背景を考える上でも不可欠と考えられる。

本 論

第一章 マフディー運動における諸集団の結集と統合

1881年にエジプト領スーダンのアバー Abā 島でムハンマド・アフマド・イブン・アブダッラーヒ Muḥammad Aḥmad b. ‘Abd Allāhi によって発せられた「正導者」宣言を契機として爆発的に全土に波及し、わずか4年後には首都ハルツームを陥れ、ついには一個の国家として結実、以後13年余にわたって帝国主義下の世界における解放の砦として機能しつづけることになるマフディー運動の歴史を通観する時、我々はそこに結集されている集団の多様さに目を見張らざるを得ない。まず「マフディー」=ムハンマド・アフマド本人の出自を見てみると、これは「町の人々」Awlād al-Balad と呼ばれるナイル河沿いの定住諸部族の出身であり、同じグループの出身者としては他に、「マフディー」の親類であるマフムード・アブド・アル・カーディル Maḥmūd ‘Abd al-Qādir、初期の戦闘において指導的な役割を果たしたムハンマド・ウスマーン・アブー・カルジャー Muḥammad ‘Uthmān Abū Qarjā、ハルツーム攻略やエジプト遠征の指揮

14) D. D. Cordell, *Dar al-Kuti: A History of the Slave Trade and State Formation on the Islamic Frontier in Northern Equatorial Africa (Central African Republic and Chad) in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*, 1977, (Ph. D. thesis, Wisconsin-Madison Univ.). 上記の題名から明らかのように、ダール・アル・クティとは1890年頃から1911年まで、現在のチャド南部～中央アフリカ北部にかけて成立していた国家である。元来ワダイ・スルタン国の属領であったが、その後ラービフ・ファドル・アッラーフの支配下に入り、1890年以後、ラービフによって王位につけられたムハンマド・アッ・サヌーシー Muḥammad al-Sanūsī のもとで、巨大な奴隷狩り基地としての性格を有す、特異な国家として成長した。1911年、フランスによって滅ぼされる。なお Cordell の同博士論文は *Dar al-Kuti and the Last Years of the Trans-Saharan Slave Trade*, Madison, Univ. of Wisconsin Press, 1985, として若干短縮された形で出版された。

15) ラービフの運動の性格については、Cordell, *op. cit.*, の中に示唆的な言及が見られる他、次の研究がある。岡倉登志「ラービフ帝国の成立過程と帝国の性格」『人文科学』(大東文化大学紀要), 1980, No. 18, pp. 121-136.

をとったアブド・アッ・ラフマーン・アン・スジューミー ‘Abd al-Rahmān al-Nujūmī, やはり有能な指揮官・行政官となったアン・スール・ムハンマド・アンカラ al-Nūr Muḥammad ‘Anqara, マフディー運動研究の重要な文献の一つである「自伝」を書いたバービクル・バドリー Bābikr Badrī などを挙げる事ができる。

他方、これとは別に、Awlād al-Balad の一派ではあるが、上記の集団とは少し毛色の変った集団—ナイル河谷出身ではあるが、はるか以前に河谷を離れて西部のコルドファーン Kordofān 地方やダール・フル Dār Fūr 地方に移住し、これらの西部地方の諸都市を根拠地として商業に従事していた人々の姿を見出すこともできる。ナイル河谷に残った Awlād al-Balad がマフディー運動以前の文献において「ヌビア人」「ハルツーム人 “Khartoumers”」「河の民 Bahḥāra」¹⁶⁾と呼ばれていた人々に相当するとすれば、こちらは「移動商人 Jallāba」¹⁷⁾と呼ばれていた人々、もしくはその親族に相当する。このグループには、コルドファー州都アル・ウバイイド al-Ubayyd におけるマフディーの協力者だったイリヤース・アフマド・ウンム・ビライル Ilyās Aḥmad Umm Birayr, ムハンマド・ア

ル・マッキー・イブン・イスマーイール Muḥammad al-Makkī b. Ismā‘īl, その甥で、マフディーの伝記を書いたイスマーイール・イブン・アブド・アル・カーディル Ismā‘īl b. ‘Abd al-Qādir, マフディーの後継者カリフ・アブダッラーヒ・イブン・ムハンマド al-Khalifa ‘Abd Allāhi b. Muḥammad のもとで財政局長を務めたイブラーヒーム・ワド・アドラーン Ibrāhīm Wad ‘Adlān などが含まれる。

ではそのカリフ・アブダッラーヒの出自を見てみると、これは西南部に広く分布するバッカーラ（「牧牛」）遊牧民集団中の一部族であるタアーイーシャ Ta‘āisha 部族の出身である。他にバッカーラ遊牧民に属する者としては、ダール・フルのエジプト守備軍を降伏に追いこんだことで有名なりザイカート Rizayqāt 部族の族長マディッブー・アリー Madibbū ‘Alī, 多くの戦闘に参加したムサーイド・カイドゥーム Musā‘id Qaydūm などがあげられる。

さらに、ダール・フル＝バフル・アル・ガザール州境のイスラミック・フロンティア¹⁸⁾に住む、イスラム化の半ば進行した部族群で、かつては「奴隷部族 “Slave tribes”」¹⁹⁾と呼ばれた集団出身の人々も、大きな役割を果たしている。マフディー国家随一の名将として名を

16) Makkī Shibayka, *op. cit.*, p. 532; R. Slatin, *Fire and Sword in the Sudan*, London, 1896, p. 51; G. Nachtigal, *Sahara and Sudan: IV Wadai and Darfur*, London, 1971, p. 242.

17) “Jallāb”は「奴隷を扱う、つまらぬ小商人」といったニュアンスをこめて用いられることの多い単語であるが、Walzによると、元来はそのような軽蔑的ニュアンスはない言葉で、「商品を持ってエジプトと内陸の間を往来する商人」程度の意味にとっておくべきだという。T. Walz, *Trade Between Egypt and Bilād as-Sūdān 1700–1820*, Institut Français d’Archéologie Orientale du Caire, p. 72. なお, “Jallāba”は“Jallāb”の複数形である。

18) 「イスラミック・フロンティア」という語が術語として必ずしも熟していないことは筆者も自覚している。ここでは一応「イスラム圏」に属すると見なされている北部スーダンと「非イスラム圏」に属するとされる南部スーダンの接点という意味で用いているが、そもそもある社会が「イスラム圏」に属するか「非イスラム圏」に属するかを見分ける指標は何なのか—そういった分類をすること自体許されるのかどうか—議論の余地のあるところである。これは究極的には「イスラム」をどう定義・理解すべきかに帰着する大問題である。にもかかわらず「イスラミック・フロンティア」なる語をここで一仮に一用いる理由は二つある。第一に、他に適当な用語が見つからないこと。第二に、「フロンティア」なる語が、このような地帯でのイスラムが持つ独特の活力（本論第三章参照）をそれなりによく表現し得ていると考えられること。

19) H. A. MacMichael, *A History of the Arabs in the Sudan*, London, 1967, Vol. I, pp. 89–91; R. Gessi, *Seven Years in the Sudan*, London, 1892, pp. 376–377.

馳せたハムダーン・アブー・アンジャ Hamdān Abū 'Anja, アビシニア王ヨハネス4世と戦ってこれを敗死させたアッ・ザーキー・タンマル al-Zākī Ṭammal, バフル・アル・ガザールでマフディーの大義のもとに蜂起, エジプト軍を攻撃したニャングルグレ Nyangulgule 族族長ヤンゴ Yango などがそれである。

上記のような多様な諸集団がマフディーの旗のもとに結集し、「アンサール Anṣār (マフディーの援助者)」という新しい集団を結成して、13年間一つの国家の構成員としての立場を共有した²⁰⁾ことは、その後のスーダン史の枠組にとって大きな意味を持つことになった。現在のスーダン共和国は、ほぼ19世紀のエジプト領スーダン、その後の英=エジプト共同統治下のスーダンの版図を踏襲しているが、そこに植民地主義による人為的な国境画定の産物としては片付け去ることのできない実体性、民衆によって主体的に育まれて来た「スーダン人意識」が存するとすれば、その原型はまさにマフディー運動期に成立した、この「アンサール」という結合の中にこそ求められるのである。1980年代の現在でもなお、マフディーの子孫率いる政党「ウンマ党」がスーダン政治の中で重要な位置を占めつづけ、特にダール・フルやコルドファーンでは圧倒的な支持を誇っているという事実は一むろんマフディー運動以後の英=エジプト共同統治期にとられた政策、そして独立後の政治過程と切り離して論じることにはできないが一基本的にはマフディー運動の時期まで立ち返らねば説明できぬことだからである。

ではマフディー運動期におけるこのように

大規模な結集・統合の下地は、かなり以前からごく自然に存在していたものなのだろうか？ 言い換えれば、マフディー運動が実際に起きた時期より20年、あるいは40年前に、同程度の規模の結集を伴う運動として起きることは可能だったろうか？ 我々は即座に否と答えることができる。試みに20年さかのぼって、1861年のこの地域の状況を概観してみれば、Awlād al-Balad とバックアラ遊牧民・「奴隷部族」の間はほとんど没交渉であることがわかる。バックアラ遊牧民・「奴隷部族」はこの時にはまだ、(1874年に滅亡することになる)ダール・フル・スルタン国に服属している。さらに、Awlād al-Balad の中で見ても、「ヌビア人」「ハルツーム人」「河の民」と呼ばれる集団と、Jallāba と呼ばれる集団の間には、まだそれほど緊密な協力関係がないことがわかる。さらに20年さかのぼって1841年の時点に立ち戻ってみれば、Awlād al-Balad とバックアラ遊牧民・「奴隷部族」が日常的に交渉を持つことは、まずあり得なかったと考えてよくなる。Awlād al-Balad の中の「ハルツーム人」「河の民」の方は一それは彼らがハルツームを根拠地とし、ナイルという河を往来して活躍したがために与えられる呼称なのだが一まだナイル交通・交易にそれほど活躍しておらず、ハルツームの南にはあまり行ったことがなかったということが明らかになる。さらに20年さかのぼって1821年の時点に戻ってみると、「ハルツーム人」という呼称は通用しなくなってしまふ。ハルツームの町が建設されてエジプト領スーダンの首都になるのは1830年代のことだからであ

20) 紅海岸に住む Beja 族 (有名なウスマーン・ディクナ 'Uthmān Diqna の出身部族)、ディンカ族のうちバフル・アル・ガザールに分布する部分、もマフディー運動に参加した。だが前者については一その軍事的な重要性にもかかわらずマフディー運動参加以前の状況についての資料が乏しく、参加に至るメカニズムの分析を行なうには材料不足であるため、本稿では扱わなかった。また後者についても、当初マフディーの呼びかけに熱狂的に応じた一そしてマフディーを「Deng (ディンカの宇宙観における最高存在) の息子」になぞらえた歌まで作られた一ことが報告されているが、その前後の状況についての情報が乏しいため、分析の対象からはずした。上記の二集団にとつてのマフディー運動に関しては、いずれ一史料利用の方法論ともからめて一稿を改めて論じてみたい。マフディーを讃えるディンカの歌については、F. M. Deng, *op. cit.* p. 28 参照。

る。1821年はエジプトがスーダンを征服したまさにその年であって、それまではのちの「ハルツーム人」「河の民」は、シンナールSinnārを都とするフンジュ Funj スルタン国の臣民であった。Jallāba はダール・フル・スルタン国に属し、北のエジプトとの交易を仲介して繁栄していた。バッカーラ遊牧民や「奴隷部族」はダール・フル南方で、このスルタン国の支配に服していた。この段階では、Awlād al-Balad（「河の民」+Jallāba）、バッカーラ遊牧民、「奴隷部族」の三者が60年後に手を携えて闘うなどということは想像もできなかったし、「河の民、ハルツーム人」などという要素は、まだ鮮明に形を現わしてすらいなかった。

言い換えれば、1881年のマフディー運動に見られた結集は、はるか昔から比較的一体性を有していた諸集団が、たまたまエジプト支配の下に入ったのを契機に、ごく自然に寄り合って反乱を起こした、といった性格のものではないのである。この時結集した諸集団は、ムハンマド・アリー朝の支配展開の諸局面とそれへの対応の中で一具体的には1821年の征服、40年代以降のナイル開発、60年代のナイル支配強化、66年のズバイル＝リザイカート協定、74年のダール・フル征服等を契機として一それぞれがムハンマド・アリー朝の支配構造の中で果たす役割を徐々に獲得し、相互に思わぬ分裂や連帯・合流を繰り返していった結果、1881年には、1841年、いや1861年でさえ予測不可能だった一体性に到達するに至ったのである。この複雑な過程を説明するのが、以下の章の目的にほかならない。

第二章 エジプト領スーダンにおける支配の展開過程

第一節 1821年征服のインパクト

1820年、ムハンマド・アリーの息子イスマーイルと女婿のムハンマド・フスラウ・アッ・ダラマリー Muḥammad Khusraw al-Dara-

mali (通称「^{デフテルダール}大蔵卿」) がスーダンに攻めこみ、シンナール・ジャジーラのフンジュ・スルタン国と、西方のダール・フル・スルタン国を攻撃したことは、その後のスーダンの歴史を根本的に決定することになった。1821年、フンジュ・スルタン国は滅び、以後その旧領はエジプトの支配下に置かれることになる。他方、ダール・フル・スルタン国は、当面、領土的にはコルドファー州を失うだけで済みはしたものの、これ以後、国家の運営方針の大きな転換を迫られることになる。一方には直接支配、他方には間接的な圧力という異なった形で作用したにせよ、エジプトの侵略は、16世紀以来この地域に続いて来た一定程度安定したスルタン国家群体制に終止符を打つことになったのだった。ではエジプトの侵略がこの地域にそれほどのインパクトを与えることになった最大の要因は何だったのかと問われた時、我々はそれは火器で武装した奴隷常備軍というものの実体であり概念であったと答えることができる²¹⁾。ムハンマド・アリーのエジプトは、火器で武装した奴隷常備軍を建設・強化するため、奴隷の供給源を求めてスーダンに進出した。だが、その際の戦闘にもすでに近代的火器で武装した奴隷軍が部分的には用いられていて、その実力はフンジュ・スルタン国を滅亡に追いこみ、ダール・フルのスルタンに自らも奴隷常備軍を建設することを決意させたのだった。それは必然的に、ダール・フルの国家機構の変質を招かざるを得ない決定であった。

ではこの時終止符を打たれた、二つのスルタン国の旧来の体制とはどのようなものだったのだろうか。

フンジュ・スルタン国とダール・フル・スルタン国は、共に16世紀に、それぞれフンジュ族(出自不明。黒人と言われる)とフル族によって建設された国家であった。フンジュ族の定着した地域(シンナール・ジャジーラ)の住民はこの時期以前にすでにイスラム化さ

21) Cordell, *op. cit.*, p. 24.

れていた。フンジュ族も現地民と混血を重ね、やがてイスラムの名のもとに支配を行なうようになった。ダール・フルの支配者もイスラム的正統性を主張し、スルタンと称したが、住民の中には非ムスリムも多く、国家儀礼の中にも非イスラム的側面が色濃く保存されていて、その「イスラム国家」性は必ずしも自明のものではなかった。王朝がイスラム的正統性を主張したのは、おそらくは後述するようなダール・フルの、国家運営方式上の必要に基いてのことであった²²⁾。

フンジュ・スルタン国がどのような基盤の上に成り立っていたのかは必ずしも明確ではない。18世紀にエジプトとスーダンの国々との間で行なわれた交易に関する記録²³⁾が残っているが、そこではむしろダール・フル＝エジプト間の交易の繁栄ばかりが目について、フンジュ＝エジプト間の交易の実態はつかみきれない。フンジュがちょうど18世紀から衰退と混迷の中に陥ってしまった—それだからこそエジプトにやすやすと征服されてしま—もしたのだが—ことはよく知られているが、それ以前の、繁栄の時期については史料が乏しい。他方、ダール・フルについてはアフリカのサヘル地帯によく見られた、交易立国型の国家だったことが知られている。王家を頂点とするフル族が支配層であり、その下にバッカーラ遊牧民、ブラック・非ムスリム・アフリカとの境に住む、イスラム化の半ば進行した「奴隷部族」が服属させられていた。王家はフル部族組織を基盤とする軍を暴力

装置として用いつつ上記の諸集団を支配し、貢納を牛・穀物・奴隷・象牙・ダチュウの羽などの形でとりたてていた。このうち、象牙・奴隷・ダチュウ羽などの商品はエジプトを初めとする北アフリカ諸国に輸出され、これらの商品と引き換えに輸入される織物・装身具・ビーズ・金属製品・武器などを国内に分配することが、王家の地位保全の支柱となっていた²⁴⁾。そしてこの、スルタン国の生命とも言うべき商品の輸出入に従事していたのは、フル族でもなく、そのさらに下の集団出身の商人でもなくて、Jallāba と呼ばれる、ナイル河谷から移住して来た商人たちであった。熱帯地域と地中海地域とを結ぶ交易の維持はスルタン国にとって死活問題であったから、Jallāba の地位は単なる「商人」という言葉から予想されるより、はるかに高いものであった。年に一度隊商を組んで象牙・奴隷等の熱帯産奢侈品を、王都アル・ファーシル al-Fāshir の北方クバイフ Kubayh から発する「四十日路 Darb al-Arba'in」^{ダルフ・フル・フルバイーン}を通してアシュート、カイロまで運び、布やビーズを持って帰って来る彼らの活動は、単なる経済行為ではなくて政治的行為、国事に関わる行為であった。カイロでは彼らはしばしば、ダール・フルを代表する外交官としての役目を果たした²⁵⁾。またダール・フル国内でも、スルタンの身边に食いこんで政治的に重要な地位を占めた。宰相を務める Jallāb さえ存在したという²⁶⁾。

フンジュでもダール・フルでも、部族組織

22) 現在までのところフンジュ・スルタン国に関する最も優れた研究は Jay Lloyd Spaulding, *Kings of Sun and Shadow: A History of the Abdallab Provinces of the Northern Sinnar Sultanate, 1500-1800 A. D.*, 1971 (Ph. D. thesis, Columbia Univ.), ダール・フル・スルタン国に関する最上の研究は R. S. O'Fahey, *State and Society in Dār Fūr*, London, 1980 である。

23) Walz, *op. cit.*, はこれらの記録—カイロに保存されている al-Maḥkama al-Shar'iya 文書—の内容を丹念に紹介している。

24) Cordell, *op. cit.*, pp. 23-28; Walz, *op. cit.*, pp. 2-53.

25) Walz, *op. cit.*, pp. 71-78; pp. 24-25. なお Walz の説によれば、「四十日路」は宗教的意味を帯びた名称であり、実際に旅程に四十日を要するわけではない。これに対し、たとえば Shaw は、実際に四十日かかるものと考えている。W. B. K. Shaw, "Darb El Arba'in: The Forty Days' Road, *Sudan Notes and Records*, Vol. 12, 1929, p. 65.

26) J. Ohrwalder, *Ten Years' Captivity in the Mahdi's Camp* (4th ed.), London, 1892, pp. 12-13.

に立脚した軍を、君主個人所有の奴隷常備軍によって置き換えようとする動きが1821年以前に存在しなかったわけではない。部族組織に立脚した軍は交替が激しいため安定性を欠く上、君主個人ではなくそのリネージに対して忠誠を誓う以上、時に君主の行動を縛りかねない存在でもあった²⁷⁾。だが、君主による常備軍建設・中央集権化の試みは、たちまちに足元の部族組織からの反発を招くことになった。実際、18世紀以降のフンジュ・スルタン国内の内紛は、スルタンが奴隷常備軍制を導入しようとしたことに端を発すると言われる²⁸⁾。ダール・フルでも、同様の試みは成功しなかった²⁹⁾。

しかし、1821年のエジプト侵略によって、フンジュは滅び、ダール・フルは上述のような国家構造を一変させなければならなくなる。エジプトの侵略はスルタンに、近代的火器を扱える強力な奴隷常備軍をつくる必要性を痛感させた。スルタンは奴隷軍建設に熱意を傾けることになるが、それにはもはや、従来のような貢納形式による奴隷供出だけでは不十分だった。これ以後ダール・フル内部でスルタンによる奴隷狩りが活発化していくが、この動きは当然、スルタン国の従来の内部構造を徐々に崩していくことになる。

スルタンが奴隷常備軍建設を急いだ背後には、エジプトに直接、領土的に征服されることへの警戒以上に、間接的・経済的に息の根を止められることへの恐怖があった。熱帯産品である奴隷・象牙等をスルタン国に運びこむルートを一断たれれば、それは交易国家ダール・フルにとっては死を意味した。エジプトのスーダン侵略の動機が奴隷供給源獲得にあったという事実、そしてエジプトが1840年代以降積極的にナイル上流地域への進

出を押し進めていくという事実は、いつの日かエジプトが熱帯地方を押さええてダール・フルの生命線を断ってしまうのではないかという、スルタンの不安を裏付けるものであった。

第二節 ナイル河谷支配の展開と「河の民」

エジプトをスーダン征服に乗り出させた直接の動機は奴隷供給源と金鉱獲得の欲求であったが、探査の結果金鉱の夢はあえなく潰え去った。奴隷狩りは主としてコルドファン南部のヌバ山地の住民を対象に行なわれたが、これもムハンマド・アリーが期待したほどの成果は上げられずに終わった。以後エジプトのスーダン統治は、住民への課税と、ナイル河開発による産業・交易の促進を目的として押し進められることになる。課税の方式はフンジュ・スルタン国時代に比べて複雑かつ苛酷なものであったが³⁰⁾、この地域の歴史に全く新しい局面をもたらしたのは、ナイル河開発という事業であった。

フンジュ時代のナイルは、産業、交易の大動脈として機能してはいなかった。むろん青・白ナイル合流点付近では航行が行なわれていたが、それより下流は瀑布・岩礁のため、限られた季節しか航行に利用できなかった。合流点から逆に白ナイルを遡行し、赤道地方にまで進む、という試みもなされてはいなかった。また、産業面について見ても、天水農耕が可能であるシンナール・ジャジーラでは盛んに耕作が行なわれていたが、合流点以北の乾燥地では牛を使った揚水車サーキヤは限られた範囲でしか用いられておらず³¹⁾、従って大規模な灌漑は未発達であった。

ムハンマド・アリーはこの種の揚水車を大

27) Cordell, *op. cit.*, p. 24.

28) P. M. Holt, *A Modern History of the Sudan*, New York, 1961, pp. 20-21.

29) Slatin, *op. cit.*, p. 42.

30) R. Hill, *Egypt in the Sudan 1820-1881*, Oxford Univ. Press, 1959, pp. 13-15, pp. 38-41.

31) *Ibid.*, p. 50.

量に建設させて灌漑地を広げ、サトウキビ生産をめざした。揚水車にはむろん税がかげられた³²⁾。ハルツーム以北の幾つかの岩礁が爆破されてカイロ＝ハルツーム間の航行がかなり容易になるのも、エジプトによる征服以後のことであった。ハルツーム近辺に多くの造船所が建設され、造船が促進された³³⁾。それはまた、白ナイル遡行の試みが開始される時期とも一致していた。換言すれば、ナイルのこのような形での大規模利用は、近代技術を背景としたムハンマド・アリー朝の到来によって初めてもたらされたのであった。その意味でナイルは、エジプト領スーダンに北から打ちこまれた「近代化」のくさびであった。そのナイルの船大工³⁴⁾の子として生まれたのがのちに「マフディー」を名乗ることになるムハンマド・アフマドだったということは、マフディー運動の本質を考える上で重要である。ムハンマド・アフマドが船大工の子だったという事実は、しばしばさりげなく、時にはロマンティックなニュアンスさえこめて語られるが、より科学的な再検討が必要である。スーダン北部のドンゴラの出身だったムハンマド・アフマドの家族が、おそらくは1840年代の後半にハルツームの近辺に移り、さらにのちに、木材が不足してきたので白ナイルのアーバー島に移るというエピソードは、当時の造船業の急成長ぶりを背景としている。ムハンマド・アフマドは、ナイルの急速な開発と、そこでの活動に携わる人々の層の変遷を目のあたりにしながら育ったであろうことが推測される。

白ナイル遡行の試みは、ムハンマド・アリ

ーの命を受けたサリーム Salim が1839年以降何度かにわたって行なった航行に始まり、やがてゴンドコロまでの航行が達成された。以降、1870年代までこの地域への進出が進むことになるが、その進出過程を内容及び担い手に即して見ていくと、ほぼ次のような時期区分をすることができる。

第一は1840年代初頭から1852年までの時期である。この時期には、白ナイルの航行及び上流との交易は、事実上エジプト当局が独占していた。ハルツームにはすでにこの頃から、白ナイル～バフル・アル・ジャバル Bahral-Jabal 岸の象牙に目をつけたヨーロッパ人商人が集まり(特にサヴォイ商人 Brun Rollet が有名)、航行をめざしていたが、エジプト当局は航行許可と引き換えに象牙の三分の一の供出を義務づける等の条件をつけており、商人たちは在カイロの自国領事らを通じて、航行の自由化を要求して運動中であった。10年以上にわたる反目と抗争の末、外交ルートを通じた交渉が効を奏してついにヨーロッパ商人側が勝利し、1852年には白ナイル航行は完全自由化される。同様に、ムハンマド・アリー以来政府による独占・独占解除・再独占といった状態を繰り返してきたスーダンの多くの産品も、この頃までにはほぼ全面的に独占を解除されるに至っていた³⁵⁾。

第二は、1852年以降1862—65年頃までの期間である。1852年は、自由航行をかちとったヨーロッパ商人が大挙して白ナイル上流～バフル・アル・ジャバルに出かけ、象牙交易に従事し始める時期を示す。最初はヨーロッパ人商人たちは主としてビーズと引き換えにバ

32) *Ibid.*, p. 38.

33) *Ibid.*, pp. 60–62.

34) Ibrāhīm Fawzī, *Kitāb al-Sūdān Baina Yadai Ghurdūn wa Kitshinir*, Cairo, 1901–2 (H. 1319), Vol. I, p. 70. によれば、ムハンマド・アフマドの父は「帆船を造る大工」だったという。これだけではその社会的地位は確定できないが、たとえば Schweinfurth は1860年代末のハルツームの帆船建設業をめぐる状況を詳細に記している。G. Schweinfurth, *The Heart of Africa: Three Years' Travels and Adventures in the Unexplored Regions of Central Africa from 1868–1871*, London, Vol. I., pp. 51–52.

35) Gray, *op. cit.*, pp. 21–28; Shukry, *op. cit.*, pp. 103–104.

リ族、ディンカ族等から象牙を入手していたが、やがてビーズの価値が下落³⁶⁾、象牙との交換手段としては機能しなくなる。このため考え出されたのが、現地民の部族を襲ってその飼っている牛を奪い、これを他の部族に渡してそれを引き換えに象牙を得るという方法だったが、これはやがて、襲撃の副産物として生じる捕虜を奴隷として象牙ともどもハルツームに売りとばすという方向に発展していくことになり、象牙枯渇の見通しとも相俟って、ついには奴隷交易の方が主産業という様相を呈すことになる。現地に腰を据えて牛・奴隷捕獲に専念する必要性から、商品倉庫兼襲撃基地であるザリーバ Zariba (原義は矢来・柵で囲んだ空間) が川沿いに建設されるようになった。また、襲撃及び(襲撃によって当然現地の人々の敵意を買うようになるので)防衛のための戦闘員が必要となり、そのために多数の北部ナイル河谷民 *Awlād al-Balad* が白ナイル上流にやって来るようになった。ザリーバ所属の、火器で武装した兵士³⁷⁾、あるいは事務職員として働くことになったこれらの人々は、「ヌビア人」「ハルツーム人」「河の民」などと呼ばれながら、かつては足を踏み入れることもなかったこの地域で、大きな役割を果たすようになる。また、白ナイル～バフル・アル・ジャバル航行が活発化するにつれ、船の乗組員としてこの地域にやって来る *Awlād al-Balad* も多くなった³⁸⁾。ムハンマド・フアード・シュクリーなどは見落している点であるが、このように大量の北部ナイ

ル河谷民が南に移動して来る最大の要因となったのは、北部において彼らにかけられる重税であった³⁹⁾。ムハンマド・アリー朝治下—特にアッバース I 世の治下—においてナイル河谷から土地を捨てて逃亡する者が多かったことはしばしば指摘されている⁴⁰⁾が、そういった人々の多くは、こうして、「奴隷交易」の一環の中に生活の場を見出していったのである。この時期の白ナイル～バフル・アル・ジャバルで活動したヨーロッパ商人としては、仏の de Malzac, マルタの de Bono, 英の Petherick, サヴォイの Poncet 兄弟などが知られているが、注目すべきことは、同時にエジプト人、シリア人、そして北部河谷民の商人も姿を現わし始めることである。代表的な例としては、エジプトのアッカード 'Aqqād 一家 (のちにはオラービー革命にも関与してくる一家である) が中心となって運営していたアッカード商会、コプトのガッターズ *Ghattās*, シェヌーダ *Shenūda*, シリア人のハリール・アッ・シャミー *Khalil al-Shāmī*, それに北部ナイル河谷民でダナークラ *Danāqla* 族出身のムハンマド・ハイル *Muhammad Khayr*⁴¹⁾ などを挙げることができる。この時期の終わり (1862—65年) は、ヨーロッパ商人の手から次第にエジプト商人 (ムスリム、コプトの双方を含む) 等の手に主導権が移って行く段階を示している。政府はこの時期から次第に奴隷交易禁圧措置をとり始め、商会の船隊に乗り組む職員の名簿を提出させ⁴²⁾職員に人頭税をかける⁴³⁾ (1862—63), 水上警察

36) Gray, *op. cit.*, p. 35.

37) これらの兵士は “hotteria”, “hutteria”, “cotteria”, “khoteriyeh” などと呼ばれた。Hill の説によると、トルコ語の *oturak* (駐在→現地兵, 私兵) がアラビア語に入って *awtūriya* となり、それがくずれて *hotteria* となったのだという。Hill, *Egypt in the Sudan*, p. 140. なお, W. Junker, *Travels in Africa During the Years 1882-1886*, London, 1892, Vol. I, p. 390 参照。

38) Gessi, *op. cit.*, p. 125 参照。

39) Makkī Shibayka, *op. cit.*, pp. 530-532.

40) Shukry, *op. cit.*, p. 97.

41) ムハンマド・ハイルについては R. Hill, *A Biographical Dictionary of the Sudan*, London, 1967, p. 261; Gray, *op. cit.*, p. 76; Shukry, *op. cit.*, p. 119.

42) Gray, *op. cit.*, p. 76.

43) Gray, *op. cit.*, p. 82; Shukry, *op. cit.*, p. 137.

を組織し、不審な船を拿捕・搜索・没収する⁴⁴⁾(1863)、ザリーバに課税する⁴⁵⁾(1865)等の政策を実施していったが、これはまず最初に、スーダンに生活の基盤を持たず、営利のためだけに来ているヨーロッパ商人たちに打撃を与えたのであった。商売から手を引く者が増え、1865年、それまでバフル・アル・ジャバル沿いに多数のザリーバを所有していた de Bono がザリーバを政府に売却してスーダンを去るに至って、この地域でのヨーロッパ商人たちの活動はほぼ終熄する。

この頃から1869年までが第三の時期となる。短い期間ではあったが、この時期、エジプト人・シリア人・北部ナイル河谷民等はこの地域の交易を一手に収めることになる。奴隷交易禁圧政策という形で政府が白ナイル～バフル・アル・ジャバルに及ぼして来る圧力は徐々に強まりつつはあったが、それでもアッカード商会やガッターズは、以前 de Bono や Poncet 兄弟の所有していたザリーバを政府から賃借することができた。特にアッカード商会は1868年には、年三千ポンドと引き換えに、政府からゴンドコロ以南の交易独占権を獲得するに至った。同商会は、南はブニョーロに近いフォウエイラ Foweira に至るまで、多数のザリーバを所有し、これらにはことごとく、北部ナイル河谷民の「ヌビア人」「ハルツーム人」「河の民」の一庸兵が配されていた。この時期はまた、この「ヌビア人」「ハルツーム人」「河の民」の比重が増したことも特徴的であった。上述のように、ほとんどすべてのザリーバの兵士・職員が「河の民」であったし、アッカード商会やガッターズの代理人として、主人がハルツームにいる間、ザリーバの采配を振る者も出て来ていた。また、私兵を用いてシルク族と戦い、

一時はファショダを制し、ハルツーム当局にシルクの支配者としての認知を迫ったムハンマド・ハイル（結局は失敗したが）の例のように、独自の勢力圏を築こうとする「河の民」の例もあった。

第四の時期は1869年から1876年までで、これは当局の奴隷交易禁圧政策がこの地域全域に武力の形をとって姿を現わし、エジプト商人やそれを補助していた「河の民」を体制の中に組みこみ、彼らの築いてきた勢力圏をエジプト領スーダンの版図に包摂してしまう時期にあたっている。具体的には1869年の S・W・ベーカー遠征隊が大きな契機となった。ナイル上流の開発と奴隷交易禁圧を旗印にヘディーヴのもとから送りこまれてきたこの大部族は、ブニョーロやバリ族と戦う一方で、アッカード商会のムハンマド・アブー・サワード・アル・アッカード Muḥammad Abū Sa'ūd al-'Aqqād の率いる「河の民」庸兵の抵抗をも挫き、以後、これまで商人たちが活動してきた領域は「赤道州」なる行政区分のもとに、当局の直接的な支配下に置かれることになる。1874年赤道地方総督⁴⁶⁾に就任した C・G・ゴードンの下で象牙交易が当局の独占下に置かれ、火器・弾薬の搬入、武装集団の結成が禁止された⁴⁷⁾ことは、商人たちの自立性を完全に粉碎することになった。1874—76年に白ナイル～バフル・アル・ジャバル沿いに政府軍基地が続々と建設され、政府軍汽船が航行するようになったことは、奴隷交易の続行をも不可能にした。むろんこれ以後も、政府軍関係者が賄賂を受けとって奴隷密輸に目をつぶっていた例は数多く報告されているが、それはもはや賄賂を贈って目こぼしをせしめようやり方でしか奴隷の白ナイル輸送はできなくなったということであり、そう

44) Shukry, *op. cit.*, p. 136.

45) *Ibid.*, pp. 141-142.

46) 1874年の行政区分改組により、エクタトリアはハルツームの中央政府から独立の地方に昇格。長官ではなく総督が置かれた。Shukry, *op. cit.*, p. 176.

47) Gessi, *op. cit.*, p. 36; Shukry, *op. cit.*, p. 191.

なればもはや大量の輸送は不可能であった。以後、ザリーバは政府に接収され、「河の民」の庸兵は政府守備軍に、ワキールは下級官吏層にと組みこまれ⁴⁸⁾、徐々に、体制内の人間として行動することに慣らされていく。アッカド商会のムハンマド・アブー・サウードはエジプト領スーダンの歴史にこののちもう一度登場するが、その時彼は、アバー島で「マフディー」宣言をしたムハンマド・アフマドの様子を偵察に行き、ついでマフディー討伐軍を指揮する、当局の手先として現われるのである(1881年)。いずれにせよ、1870年代半ばまでに白ナイル～バフル・アル・ジャバルはエジプトの正式の支配下に入り、それに先立ってこの地域で活動していた「河の民」たちは、政府官吏の御仕着せに身を包むことになったのであった。

ここで、1840—70年代にエジプト政府がとった「奴隷交易禁圧」措置について、各時期のナイル河谷支配との関連において簡単に見ておこう。第一の時期について言えば、この時期にエジプト政府によって示された反奴隷制・反奴隷交易の姿勢は、ナイル河谷支配と直接の関係を持つものではなかった。この時期にはたびたび、在スーダン・エジプト軍が徴兵のため、あるいは税未納部族に対する制裁行動として奴隷狩りを行なうこと(一般的な現象であった)を禁止し、また政府軍兵士の給料を奴隷で支払うこと(これもまた一般的なであった)を禁止する声明が発せられたが、これはエジプト政府が、列強及びオスマン帝国(オスマン帝国も1847年以降奴隷交易禁圧政策を開始する)から加えられる、内政干渉の圧力をかわすために示したジェスチュア⁴⁹⁾であった。第二、第三の時期に至って奴隷交易禁圧政策は、ヨーロッパ人、ついでエジプト人、シリア人、北部ナイル河谷出身商人らの行動を規制し、航行自由化によって失

われた政府のナイルに対する統制力を回復・強化しようという意図のもとに用いられるようになった。同時に、商會所属の船員・職員に対する人頭税の賦課、ザリーバへの課税は、重税に耐えかねて北部ナイル河谷を逃亡し、庸兵や船員として南部の奴隷交易の中に生活の場を求めた人々を、再掌握しようとする試みでもあった。そしてこれらの目的は、第四の時期に至って完全に達成された。

白ナイル～バフル・アル・ジャバルにおいて「河の民」たちが統治体制の中に包摂されていった過程を見る時、我々は、1860年代以降西南部のバフル・アル・ガザール地方において「河の民」たちがより自主的な活動を示し、一時はかなり独自な性格を持った勢力圏を築いたことを思い起こさざるを得ない。そしてそこには、「河の民」の枠を越えた、全く新しい統合のパターンさえ見出されるのである。だが、そちらに議論を進める前に、ここでダール・フルの状況を少し見ておく必要がある。

第三節 ダール・フルの変質と Jallāba

1821年にエジプトの侵略によってコルドファンを失ってから、1874年に「奴隷商人」アッ・ズバイル・ラフマ・マンスールの軍によって滅ぼされるまでの、ダール・フル・スルタン国内部の状態を、主として Jallāba の行動様式の変化を通じて復元してみようというのが本節の目的である。

1821年以降スルタンが奴隷常備軍の建設に着手したことは、ダール・フルのそれまでの内部構造を、突き崩していく方向に作用したと考えられる。奴隷常備軍建設のためには、これまでのような貢納形式によって得られる奴隷だけでは当然不足であった。これ以降南方への奴隷狩り遠征が活発化した⁵⁰⁾。これに刺激されてバックラー遊牧民による「奴

48) Gessi, *op. cit.*, pp. 76-77, p. 83.

49) 1842年には、カイロの公開奴隷市場も閉鎖された。

50) Cordell, *op. cit.*, p. 25.

隷部族」等を対象とした奴隷狩り⁵¹⁾も活発化した。スルタンはバックーラからこれらの奴隷を買いとる形でも奴隷を入手したであろうことが推測される。さて、こうして入手された奴隷が王都に集められても、今度はそれがそのまま Jallāba に売り渡されるということとはなくなり、最上の奴隷はスルタンの常備軍に編入されることになる。こうなると、Jallāba がアジュートに運んで行く奴隷を王都で自動的に入手できるという、これまでの構造はこわれることになる。そこで当然 Jallāba も対策を講じることになる。一つは代理人を直接南部に派遣して、そこで布やビーズと引き換えに奴隷を入手させるという方法であり、このような代理人の存在はシュヴァインフルト Schweinfurth が記録している⁵²⁾。また、自ら南部に長期滞在もしくは定住して現地の部族と交易し、部族間抗争等で得られた捕虜奴隷を分けてもらい、これを北部に送ることに専念する Jallāba も出現する。これはシュヴァインフルト、ナハティガル Nachtigal が共に伝えている現象である⁵³⁾。また、ナハティガルは(1870年代初頭に) Jallāba がカイロから運んで来たビーズや綿製品を、ダール・フルで交換するのではなく、ボルヌー、ハラサランド等に持って行ってさまざまな商品と交換したあと、最終的にはダール・フルの西隣のワダイ・スルタン国で奴隷・ダチョウ羽に換え、これをカイロに運んでいる例を記している⁵⁴⁾。

さらに、東方にエジプト領スーダンが成立したことも、Jallāba の行動様式を大きく変えたと考えられる。ハルツームがエジプト領スーダンの首都となり、それがカイロと結ば

れてからは、今までのように「^{ダルフ・フル・フルバイーン}四十日路」經由でアシュート～カイロと交易するかわりに、ハルツームに象牙・ダチョウ羽・(交易禁庄前は)奴隷を送って、引き換えに布・ビーズ・火器を得ることも可能になる。そこでダール・フル＝ハルツーム間の交易が発展し、その中継地としてコルドファーンのアル・ウバイド等の都市が繁栄することになる。ダール・フルのかわりに、アル・ウバイド等に本拠を移す Jallāba も増えて来ることになる。マフディーのアル・ウバイドでの協力者として知られるイリヤース・アフマド・ウンム・ビライルも、ダール・フル＝ハルツーム間の中継交易で財をなした人物であった⁵⁵⁾。こうしてコルドファーンの諸都市が栄えるようになれば、当然、ダール・フルの王都アル・ファーシルのかわりに、コルドファーンから出発して南部に奴隷を買いに行き、もっぱらダール・フル南部とコルドファーンの間を往き来するという Jallāba も出現することになる。事実、1853年には、コルドファーンと南部の間を往来する Jallāba の存在が報告されるようになる⁵⁶⁾。

結局、ダール・フル王都に大量の売却用奴隷が集められるという構造が崩壊したために、ダール・フル北部は居ながらにして奴隷という熱帯産品が手に入る場所ではなくなり、Jallāba はあるいはワダイ、あるいは南部へとせわしく移動しなければならなくなった。単に「エジプトに商品を運んで来る商人」程度の意味であって「つまりぬ行商人」といった軽蔑的ニュアンスは含んでいない、とワルツ Walz が主張する⁵⁷⁾ “Jallāba” という語が、ロバー頭に綿布や火器を積んで奴隷供給

51) Gessi, *op. cit.*, p. 370.

52) Schweinfurth, *op. cit.*, Vol. II, p. 417.

53) *Ibid.*: Nachtigal, *op. cit.*, p. 354.

54) Nachtigal, *ibid.*

55) Hill, *A Biographical Dictionary of the Sudan*, p. 180.

56) Gray, *op. cit.*, p. 66.

57) Walz, *op. cit.*, p. 72 (注(17)参照).

地域へとさすらって行く小商人，というお決まりのイメージ⁵⁸⁾を急速に帯びるようになるのはこの頃のことである。同時に，ダール・フル北部の都市は，根拠地とする必然性のない，一個の通過地点へと零落しつつあった。ナハティガルは，「四十日路」の始点であり，かつて Jallāba が集中していたクバイフの町の人口が，1859—74年の15年間に激減したことを記している⁵⁹⁾。ダール・フル・スルタン国の交易国家としての構造は完全に崩壊しつつあった。

だが，Jallāba がアル・フェーシルやクバイフに坐っているだけでは満足な数の奴隷を入手できなくなったのは，スルタンが奴隷常備軍を建設し始めたからだけではなかった。また，南部に奴隷を買い付けに行った Jallāba は，現地の部族との直接交渉によってのみ奴隷を入手したのではなかった。ここで我々は，1860年代後半—70年代にかけてバフル・アル・ガザール～ダール・フル南部に成立しつつあった特異な集団—それは巨大な奴隷狩り基地であると同時に一個の国家の様相すら呈しつつあった—に目を向けなければならない。

第四節 バフル・アル・ガザールの「奴隷狩り」帝国

西方から白ナイルに流れこむ一支流バフル・アル・ガザールは，バフル・アル・ジャバルに比べると開発が遅れ，1855年まで航行の対象とされることがなかったが，それでも航行の翌年からはヨーロッパ人，トルコ人，シリア人，エジプト・ムスリム，コプトなどの商人が続々と乗りこんでザリーバを建設した。1860年代の初頭に，バフル・アル・ジャバルにおいてと同様の過程を経てヨーロッパ商人が姿を消した時，そこに残っていた有力

なザリーバ所有者はエジプト・ムスリムのアリー・アブー・アムーリー ‘Alī Abū ‘Amūrī, マフジューブ・アル・ブサイリー Mahjūb al-Buṣailī, トルコ人のキュチュク・アリ Küçük Ali 等であった。ザリーバの多くはバフル・アル・ガザール地方の中では東寄りの部分—比較的白ナイルに近い部分—に建てられており，これらのザリーバはバフル・アル・ジャバル沿いの場合と同じような過程を経て成立・発展していた。すなわち，最初は象牙交易が目的であったが，まもなく象牙との交換手段を入手するための牛狩りが始まり，それに付随して手に入れた奴隷が，いつか重要な商品となって行った。この地域の場合，入手した象牙をバフル・アル・ガザールの川港マシュラア・アッ・リクク Mashra‘a al-Riqq まで運び出すための輸送手段が他に欠如していたから，奴隷は輸送手段としても必要であった⁶⁰⁾。各ザリーバには「河の民」，「ハルツーム人」出身のワキールが置かれ，多数の「河の民」が兵士・職員として働いていた⁶¹⁾。

だが，エジプト商人アリー・アブー・アムーリーの部下として1856年にバフル・アル・ガザール入りした「河の民」アッ・ズバイル・ラフマ・マンスールの活動は，次第にこの地域に，バフル・アル・ジャバルとは異なった様相をもたらすようになる。

ズバイルはエジプト当局の白ナイルに対する統制が強まる1860年代前半に，バフル・アル・ガザール地方の西部へと分け入り，アザンデの諸部族の間に入りこんでザリーバを造り，交易し，勢力を拡張する。さらに1865年には一部族を征服してその領土を手に入れ，デム・ズバイル Dem Zubayr なる町を都とした，一個の国家の君主として君臨するに至る。そして1866年には，バフル・アル・ガザールの北，ダール・フル南東部のシャッカー

58) Schweinfurth, *op. cit.*, Vol. II, p. 412.

59) Nachtigal, *op. cit.*, p. 256.

60) Gessi, *op. cit.*, p. 51.

61) *Ibid.*, pp. 52–53.

Shaqqā 付近分に布するバッカーラ遊牧民リザイカート部族と協定を結ぶことによって、ナイルを経由せずに、バフル・アル・ガザールから陸路コルドファンに奴隷を輸送する道を開くのである。バフル・アル・ジャバルに前述のベーカー遠征隊が派遣されたのと同じ1869年、バフル・アル・ガザールにもハルツームの当局からムハンマド・アル・ビラーリー Muḥammad al-Bilālī なる人物率いる遠征隊が派遣されて来て、全ザリーバのワキールに服属を命じるが、ズバイルは抵抗してビラーリーと戦い、勝利し、これを契機にかえってバフル・アル・ガザール全土を掌握することになる。当局も結局はこの事実を追認し、ズバイルをバフル・アル・ガザールの統治者に任じ、ベイの称号を与えることを余儀なくされる。バフル・アル・ガザールからダール・フル南部にかけての住民はことごとく彼に服属し、タアーイーシャのようなムスリム部族も、テルカウナ Telqauna のニャングルグレ族のようなイスラム化の半ば進んだ部族も、クレスシュ Kresh 族のような非ムスリム部族も、彼に貢納を納めていた⁶²⁾。

以上がズバイルの経歴についてごく一般的に知られていること⁶³⁾であるが、さらに細かく検討してみると、このいわゆる「奴隷商人」の成功の物語には、従来の「河の民」「ハルツーム人」商人の行動様式には見られない、新しい要素が幾つも読みとれることがわかる。

まず第一に、ズバイルは「河の民」からな

る兵士以外に、黒人(奴隷)兵、いわゆる「バーズィンキル Bāzinqir」を採用し、これによって強大な軍隊を編成した⁶⁴⁾。Bāzinqir の起源について、ズバイル自身は、バッカーラ遊牧民の所有していた奴隷たちが自分の人徳を慕って逃げて来たので、これを「河の民」出身の部下ラービフ・フェドル・アッラーフの指揮下に置いて、軍隊として使ってみたのだと語っている⁶⁵⁾。これが事実かどうかは疑わしいが、彼の Bāzinqir 軍の中に、以前は伝統的にフル族やバッカーラ遊牧民の奴隷狩りの対象であった「奴隷部族」マンダラ Mandala 等の出身者が含まれていたことは事実である。また、現地の非ムスリム部族集団アザンデ諸族の人々が、進んで Bāzinqir を志願したことも知られている。ズバイルはこれらの Bāzinqir を用いて奴隷狩りを行なったが、それによって捕えられた奴隷のうち最良のものは、これもまた、Bāzinqir 軍に加えられて火器(レミントン・ライフル、マスケット銃)の扱いに習熟させられた。Bāzinqir は妻帯を許され、ザリーバの中に土地を有し、時には彼自身の奴隷を所有した⁶⁶⁾。後年ズバイルの影響をズバイルの部下だったラービフを介して間接的に一受けてやはり Bāzinqir 軍を創設した、ダール・アル・クティのムハンマド・アッ・サヌーシー Muḥammad al-Sanūsī の例から逆に推量することが許されるのなら、捕獲された黒人は Bāzinqir になると同時にムスリムになることを勧められ、

62) Nachtigal, *op. cit.*, p. 318.

63) ズバイルの経歴についてまとめた形で述べたものとしては、H. C. Jackson (ed.), *Black Ivory or The Story of El Zubeir Pasha, Slaver and Sultan as Told by Himself*, New York, 1970; Na'ūm Shugayr, *Ta'rikh al-Sūdān al-Qadīm wa-al-Ḥadīth wa Jughrāfiyah*, Cairo, 1903, Vol. III, pp. 60-88.

64) Bāzinqir の語源についてはさまざまな説が出されている。ズバイルがそれから黒人兵を徴したところの特定の部族名に由来しているのだという説 (Wingate, *op. cit.*, p. 28)、スーダン軍がメキシコに遠征した時その指揮をとった仏人元帥 Bazaine の名に由来しているのだという説 (Hill, *Egypt in the Sudan*, p. 140)、「奴隷軍」を表わすチャド・アラビア語なのだという説 (Cordell, *op. cit.*, p. 25) などがそれである。

65) Jackson, *op. cit.*, pp. 37-39.

66) Schweinfurth, *op. cit.*, Vol. II, pp. 421-422.

事実上奴隷の地位を脱したようである⁶⁷⁾。白ナイル～バフル・アル・ジャバルで活動したムハンマド・ハイルやムハンマド・アブー・サウードが「河の民」から構成された軍しか持たなかったことを考えると、Bāzinqir 軍の創設は、ズバイルが当局から独立の勢力圏を築くことを可能にした、大きな要因だったと考えることができる⁶⁸⁾。(ちなみにズバイルはまた、アザンデの部族長たちに火器の用法を伝授して、独自に奴隷狩りを行なわせるといったこともやっていた。これらのアザンデの部族長—たとえばゼミオ Zemio⁶⁹⁾など—は彼ら自身の独自の Bāzinqir 軍を持つに至り、やがてはムハマド・アッ・サヌシーのダール・アル・クティに類似した国家を築いていくことになる。)

第二にズバイルは、ナイルに商品運び出すという、エジプトによるナイル河谷開発開始以来「河の民」の頭の中に徐々に根をおろすに至っていた固定観念を破り、コルドファーンを突っ切る形でナイル・ルートを放棄するという行動に出た。彼にこの行動をとらせたのは、すでに第二節で触れた、1862—65年間に政府によって導入された一連の奴隷交易禁圧措置＝ナイル河谷支配強化策であった。ズバイルのこの行動によって、リザイカート部族をはじめとする、これまでダール・フルの支配下に置かれていてナイル河谷民とは没交渉だったバックアラ遊牧民との、恒常的

提携が生じた。

第三に、バフル・アル・ガザール～ダール・フル南部に成立したズバイルの勢力圏は、奴隷を求めてダール・フルから南下して来る Jallāba を引きつけることになった。「ハルツーム人たち (Khartoumers) と Jallāba の提携」としてシュヴァインフルトが描いた結合⁷⁰⁾が生じることになり、Jallāba はズバイルらのザリーバにやって来てそこで奴隷を手して帰るようになった。Jallāba が自分たちでじかに現地人と交渉する必要はなくなった。ロバに布と火器を積んでザリーバに来れば、それをザリーバの「河の民」兵士や職員や Bāzinqir やその家族などに売って、引き換えに奴隷を得ることができるようになった⁷¹⁾。「ハルツーム人」たちのザリーバにファキーフ faqih (宗教教師) 等の役割も兼ねつつ常時滞在する Jallāba も増加した⁷²⁾。このようにしてズバイルの勢力圏に吸収されて来た Jallāba の中には、コルドファーン等の農民で、重税のための生活が困難になり、土地を捨てて Jallāba に転向した者も多かった⁷³⁾。そのような人々が、リザイカートとの協定によって開かれたルート⁷⁴⁾を通して、シャッカーとアル・ウバイドの間を絶えず往き来していた。このようにして、アル・ウバイド在住の商人とズバイルの勢力圏との間にも、間接的ながら一定の絆が培われた。

以上から明らかなように、この時期のバフ

67) Cordell, *op. cit.*, p. 155.

68) Bāzinqir 軍の創設が、単に必要に迫られたズバイルの思いつきによるものだったのか、それともこの地域にバフル・アル・ジャバルの場合より Bāzinqir 軍の創設を容易にするような条件があって、それがズバイルに自然とこのような行動をとらせることになったのかは、さらに研究してみる必要がある。バフル・アル・ジャバルの住民(シルク、バリ、ディンカ等)の部族組織と、バフル・アル・ガザールの住民(アザンデ等)のそれとの間に、差異があったか否かも調べてみる必要がある。もし Bāzinqir という単語が Cordell の言うようにチャド・アラビア語ならば(注(64)参照)、ワダイ・スルタン国等の影響も考える必要がある。

69) Hill, *A Biographical Dictionary of the Sudan*, p. 389.

70) Schweinfurth, *op. cit.*, Vol. II, pp. 365-366.

71) *Ibid.*

72) *Ibid.*, p. 417.

73) *Ibid.*, p. 415.

74) Gessi によれば, "Zaharia Road" と呼ばれる道であった。Gessi, *op. cit.*, p. 389.

ル・アル・ガザール～ダール・フル南部には、ムハンマド・アリー朝によるスーダン支配が始まって以来かつて見られなかったほどの、多様な集団間の緊密な結合が生じていた。そこには、「奴隷交易禁圧」という名のもとに行なわれるナイル河谷支配強化に耐えかねて逃避して来た「河の民」集団と、交易国家ダール・フルの終末期の混乱の中で行動様式の転換を迫られた Jallāba, コルドファンで重税に苦しむ農民の意外な出会いが見られた。さらにそこには、これまでダール・フルの支配下に置かれていたバッカーラ遊牧民との提携があり、Bāzinqir 軍という組織を通じて、「奴隷部族」、非ムスリム諸部族との奇妙な結合が見出された。確かにこの社会は一個の巨大な奴隷狩り基地であり、周囲に荒廃をもたらす存在であった。だが、注意して見ると、この奴隷商人がつくり上げた社会にはすでに、奴隷を売って利潤を得るという機能と並んで、奴隷狩り・奴隷交易という名の活動を介して一種の結合を創出していくという機能が生じており、両機能の間に矛盾が存在していたこと、そして後者が前者を圧倒する傾向が生じ始めていたことに、否応なしに気づかされるのである⁷⁵⁾。

このような社会の存在は、当時の状況の中では二重の意味を持っていた。エジプト当局の目には、それは当然危険な存在として映った。だが、それは同時に、ダール・フル・スルタンの目には、ムハンマド・アリー朝の侵略の手先として映った⁷⁶⁾。それは、交易国

家ダール・フルの生命線である熱帯地帯に、火器で武装した奴隷常備軍を有する勢力が出現するのではないかという、1821年以來の積年の悪夢の実現であった。事実ズバイルの帝国は、50年間のムハンマド・アリー朝支配の一つの帰結として生まれたものであった。そしてこの帝国は、1874年にダール・フル・スルタン国を滅ぼした。

ズバイルがダール・フルを攻撃するにあたってムハンマド・アリー朝の権威を援用したこと、それゆえ征服後のダール・フルはエジプト領に併合されてしまったこと、当時のスーダン総督イスマーイル・アイユーブ Ismā'il Ayyūb とズバイルの間で対立が生じ、抗議のためにカイロに赴いたズバイルがそこで軟禁状態に置かれる結果になったことは、エジプト領スーダン史上有名なエピソードである。そしてズバイルの子スライマーン Sulaymān のもとで1878年に大規模な対エジプト反乱が起きたこと、それがコルドファン、ダール・フル中の Jallāba を結集し⁷⁷⁾、アル・ウバイド等から火器・弾薬の密かな供給を受けながらも⁷⁸⁾、一年間の戦いののちに政府軍に敗北したこともよく知られている。1879年のこの敗北ののちは、バフル・アル・ガザール～南ダール・フルもエジプト当局の体制下に組みこまれることになる。政府の分断政策により、リザイカート等のバッカーラ遊牧部族は優遇され、スライマーンの Bāzinqir 軍残党は解体されてバッカーラ各部族に分配された⁷⁹⁾。Jallāba の多くは強

75) Bāzinqir はそのような新しい結合の核であり、それは自己目的的に増加しつつあった。付近の住民との間には貢納関係が結ばれ、彼らはザリーバ周辺で耕作に従事していた。それゆえ奴隷狩りの対象地は常により遠くへと求められねばならなくなり、ズバイルの部下たちはアザンデのさらに西に住むバンデ族の地—ここでのちにダール・アル・クティが成立する—にまで出かけて行かねばならなかった。このような社会がそのまま発展しつつけたとしたらそれはどのような形で安定に達することになるのか、それとも安定は不可能なのかを考察することはそれ自体重要な意味を持つが、本稿のテーマを逸脱することになるのでここではこれ以上考究しない。

76) Slatin, *op. cit.*, p. 51.

77) Gessi, *op. cit.*, p. 266, p. 326.

78) *Ibid.*, p. 288; Slatin, *op. cit.*, p. 19.

79) Slatin, *op. cit.*, pp. 25-27.

制的にバフル・アル・ガザール、ダール・フルを退去させられ、北部ナイル河谷に放逐⁸⁰⁾された。だが、政府に協力的と見なされた一部の Jallāba はそのまま残ることを許され、あるいはダール・フルやバフル・アル・ガザールの下級官吏として用いられた。バフル・アル・ガザールのザリーバはことごとく政府の基地となり、デム・スライマーン ^{ムディール} Dem Sulaymān (もとのデム・ズバイル) は長官の座所となった。

ダール・フル征服が完了した段階でバフル・アル・ガザール～ダール・フル南部に成立していた一定の結合を振り返ってみれば、我々はそこに、のちにマフディー運動の中で重要な役割を果たすことになる多くの顔ぶれを見出すことができる。ズバイルの「河の民」出身の部下の中には、それ以前はアッカード商会の船隊の水先案内を務めていたと言われるムハンマド・ウスマーン・アブー・カルジャー、またアン・ヌール・ムハンマド・アンカラなどを見出すことができるし、一説によるとマフディーのおじマフムド・アブド・アル・カーディルも彼らの同僚だったという。ズバイルの Bāziṅqir 軍の中にはハムダーン・アブー・アンジャヤアッ・ザーキー・タンマルがいる。また、リザイカート部族の中にはマディッブー・アリーがいるし、テルカウナのニャングルグレ族の中には、のちにそのマディッブーからマフディーの伝言を受け取って蜂起することになるヤングもいる。さらにタアーイーシャ部族に目を移すと、そこにはのちにナイル河岸で初対面のムハンマド・アフマドに向って「貴方はマフディーです」と断言することになる(カリフ)アブダッラーヒがおり(ちなみにアブダッラー

ヒは1873年頃、ズバイルに向って「貴方はマフディーか否か」と尋ねたことがあったという)⁸¹⁾、アブダッラーヒの (faqīh だった) 父親の弟子、ムサーイド・カイドゥームの姿も見出すことができる。アル・ウバイドにはイリヤース・アフマド・ウンム・ビライルもいて、スライマーン反乱の際反徒たちは、この大商人の力を借りることも一考した⁸²⁾。

ではこのようなメンバーがこの時点においてこの地域で、マフディー運動と同じような、エジプト支配を覆すことになるような運動を起こすことは可能だったであろうか? 不可能だったとすれば、その原因はどこにあったのだろうか? 言い換えれば、スライマーン反乱は、マフディー運動と同じような解放運動の要素を有していただろうか?

スライマーン反乱に解放運動としての要素が皆無だったとは思えない。反徒たちからは、「ここは我々の国だ。ここにはエフエンディナー Effendinā (=ヘディーヴ) などいない!」という関の声がきかれたと言われる⁸³⁾し、前述のように多数の貧しい Jallāba が—それもスライマーン側が劣勢に立つようになってから—反乱に加わるために駆けつけたのである。「faqīh は聖戦を叫んだ」と、鎮圧にあたった政府軍司令官は記している⁸⁴⁾。

実際、スライマーン反乱は、成功すれば、のちのラービフ・ファドル・アッラーフの運動と同程度の重要性は持ち得たのではないかと思われる。事実、スライマーン配下の「河の民」出身の指揮官ラービフはこの反乱に参加し、スライマーンの投降の直前に、これと袂を分けて西へ去り、その後あの大帝国を築くことになるのである。ただ、これから逆に言えることは、スライマーン反乱はたと

80) Gessi, *op. cit.*, p. 364.

81) Na'ūm Shuqayr, *op. cit.*, Vol. III, pp. 70-77; Jackson, *op. cit.*, pp. 57-58; Slatin, *op. cit.*, p. 127. ただし、いずれもズバイルの談話に基いているので、そのまま信用するのは問題がある。

82) Slatin, *op. cit.*, p. 24.

83) D. G. Hill, *Colonel Gordon in Central Africa 1874-1879*, New York, 1969, p. 372.

84) Gessi, *op. cit.*, p. 266.

え1879年に敗北を免れていたとしても、ラービフ運動と同じような型の革命に終わっていたらろうということ—すなわち、西に去るといふ行為に典型的に表われているように、ムハンマド・アリー朝の「近代化」という支配構造を、内側からこわすのではなく、その外に脱出・逃避するという形で否定する型の運動になっていく可能性が強かったらろうということである。ズパイルからラービフへと受け継がれたのはおそらく、奴隷狩り・奴隷交易といった活動を通じて新たな結合をつくり出していき、それによって古いタイプの交易国家の枠組を解体していくという運動の系譜であった。ズパイルはダール・フルを滅ぼしたあとワダイ・スルタン国の征服を計画していた⁸⁵⁾し、ラービフもワダイと対決したのちバギルミー、ボルヌーといった一連の交易国家の解体に取り組み、これを通じて巨大な帝国を建設していった。それは確かに一つの変革の動きであり、強烈な結集と統合の論理を備えてはいた（それだからこそ、のちにフランス帝国主義に対する抵抗を展開することが可能になった）が、アフリカに打ちこまれた「近代化」のくさびであるエジプト領スーダンという支配の構造を、内側から変えることには直接は結びつかない運動であった。

マフディー運動のマフディー運動たるゆえんは、それが1860年代後半—1870年代にバフル・アル・ガザール～南ダール・フルで実現されたのと類似の統合の論理を用いながらも、「近代」的支配構造の真只中で—北部ナイル河谷から逃避せずに—展開されたことにあった。エジプト支配の終点バフル・アル・ガザール～南ダール・フルで、公的支配の手が届く一瞬前に獲得された統合の論理は、もう長らく支配構造の中に取りこまれ、体制の一員として機能させられている、北部ナイ

ル河谷の人々のもとにもたらされねばならなかった。それは象徴的には、1878年に⁸⁶⁾南ダール・フルからナイル河谷に辿り着いた(カリフ) アブダッラーヒの発した、「マフディー」という言葉によってもたらされた。

次章では、北部ナイル河谷の人々に再び目を移し、なぜ「近代化」の只中であつた彼らにとって、より「遅れて」いたはずの西部からもたらされた「マフディー」の概念が解放の契機となり得たのかを考え、それを通じて、オラービー革命、ラービフの運動と対比した時のマフディー運動の位置づけを試みて結びとしたい。

第三章 エジプト領スーダンの解放

北部ナイル河谷（1881年の段階で見れば、アル・ウバイドも広義にはこの範疇に入れて差しつかえないであろう。ハルツームとの関係において栄えた町だったし、元来はダール・フルとの関係において生きていたこの町の Jallāba も、1874年以降は東部との結びつきを深め、ハルツームの人々と意識面では同化していたと思われる）においてマフディー運動に参加することになった人々の多くは、エジプトのオラービー革命に共感を覚え得るような心理的位置にある人々だったのではないかと想定することができる。副王サイード期の改革で軍隊に入る道は開けたが、その後支配機構の末端に身を置く中で支配の矛盾に目ざめることになった農^{アラブ}民出身軍人たちとちょうど同じように、北部ナイル河谷の住民は支配体制の一環に組みこまれ、そこで割り当てられた機能を果しつつも、支配の正統性を疑うようになっていたと考えられる。マフディーの宣言文・書簡の中に繰り返し現われるのは、世俗の富・功名心・競争心を捨てよという呼びかけ⁸⁷⁾であり、捨てよ、と言

85) Jackson, *op. cit.*, pp. 73-74.

86) Ibrāhīm Fawzi, *op. cit.*, Vol. I, p. 75.

87) Muḥammad Ibrāhīm Abū Salīm (ed.), *Manshūrāt al-Mahdiyya*, Bairūt, 1969, pp. 47-60, pp. 283-286; Babikr Badri, *The Memoirs of Babikr Badri*, Oxford Univ. Press, 1969, p. 34.

うからにはそこに窺われるのは一搾取され尽した人々ではなく一むしろ統治に利用された人々、エジプト支配下で一定の地位（下級官吏であれ、^{ウラマ}シャリーア法廷に仕えるアズハル出のイスラム法学者であれ、あるいはまた、やはり支配の道具と墮してしまっているスーフィー教団の指導者であれ）を獲得し、小金を貯め、名誉や称号を求めて競争に明け暮れていたであろう人々の姿である。だがその一方で彼らの視野には、拡大する貧富の差、コルドファンで重税にあえぐ民衆の姿も入っている⁸⁸⁾。自らは支配構造の中である程度の地位と利益には与りつつも、その支配の矛盾に悩み、正統性を疑う、そうした一種の「インテリ性」とでも形容しうる傾向が、マフディー運動参加者（特にジャジラ付近やアル・ウバイドの比較的裕福な人々）の態度の中には窺われる。

オラービー革命参加者とマフディー運動参加者の間の心理的紐帯についてはこれまで、オラービー革命に賛同した人々の側からの片想いのなアプローチはあっても、マフディー運動参加者の側はオラービー革命のような動きには全く無関心、もしくは軽蔑をもって対していた、という面ばかりが強調されて来た。だが、マフディーの死後カリフ・アブダッラーヒの命を受けたイスマーイール・アブド・アル・カーディル（アル・ウバイドの出身）が執筆したマフディーの伝記一つをとってみても、そのような把握は誤りであることがわかる。そこにはたとえば、「エジプトのウラマーはオラービーを支持する意見書を^{アトワ}発したそうだが、それならばなぜ彼らはマフ

ディーを否認するのか!? マフディーもオラービーと同じくトルコ人と闘っているのだ」という意味の言辞がある⁸⁹⁾。ここには、自分たちは共に「トルコ人」支配を脱するために闘っているのだという共感・一体感が見出される。

だが、エジプト人の側は、「共にトルコ人と闘っている」という観点からスーダン人と一体感を感じることはあまりなかったようである。オラービー革命に直接参加した層でスーダン人との連帯を求めた例は、『我が同胞—信仰と帰依の民—のすべてに与えるアッワームの忠告』を書いてスーダン人に流布しようとした、アフマド・アル・アッワーム Ahmad al-'Awwām⁹⁰⁾しか知られていない。マフディー運動中ダール・フルで政府軍司令官スラティン Slatin（オーストリア人）と共に籠城していたエジプト軍将校たちは、「エジプトではヘディーヴがあまりにキリスト教徒びいきなものだから、オラービーがヘディーヴを追って全権を握ったそうだ。我々もこのキリスト教徒（スラティン）を辞めさせさえすれば、マフディーになぞ簡単に勝てるのに」と噂し、語り合っていたという⁹¹⁾。ここには、自分たちを「ムスリム」として意識し、ムスリムのキリスト教徒に対する闘争は当然視する一方で、「ムスリム」の「ムスリム」に対する支配（エジプトのスーダンに対する支配）には何らの矛盾も感じない、という心理が露呈している。マフディー討伐に向けた政府軍指揮官ユースフ・ハサン・アッ・シャッラーリー Yūsuf Ḥasan al-Shallālī がマフディーに送った手紙にも同様の—ムスリムで

88) Haim Shaked, *The Life of the Sudanese Mahdi: A Historical Study of Kitāb Sa'ādāt al-Mustahdī bi-Sirat al-Imām al-Mahdi (The Book of the Bliss of Him Who Seeks Guidance by the Life of the Imām the Mahdi) by Ismā'il b. 'Abd al-Qādir*, New Brunswick, 1978, p. 105; Muhammad Ibrāhīm Abū Salīm, *op. cit.*, pp. 196-197.

89) Haim Shaked, *op. cit.*, p. 93.

90) Ibrāhīm Fawzī, *op. cit.*, Vol. I, pp. 358-360 によれば、この小冊子はオスマン帝国とムハンマド・アリー朝を攻撃し、オラービー革命の顛末について述べ、マフディーへの支持を呼びかける内容のものであった。

91) Slatin, *op. cit.*, p. 204.

あることで自己の支配を正当化する一論法が用いられていたであろうことは、マフディーが彼に出した返事から窺われる⁹²⁾。

マフディー運動の北部ナイル河谷における担い手たちの中には、もしも数年マフディーの出現が遅れていれば、1881—82年のオラービー革命に賛同してこれに何らかの形で協力することになった者も多かったかもしれない。だが、もし仮にそうなったとしても、共闘の過程では必ずや矛盾が顕在化することになったであろう。「トルコ人（オスマン帝国とその背後にあるヨーロッパ列強）を追い出す」ことでは一致し得たとしても、そのあとでエジプト人たちが「トルコ人」でもなく「非ムスリム」でもない自分たち（＝「ムスリム」）によるスーダンの支配を、その支配の「イスラム性」によって正当化する姿勢を示したとすれば、連帯には困難が生じたであろう。

実際、ムハンマド・アリー朝のスーダン支配は、常に「イスラム性」を打ち出しつつ自己を正当化して来たのであった。体制側はモスクを建設し、アズハル出身ウラマーを送りこみ、スーフィー教団を懐柔した。従って、そうした支配の構造全体を覆すには、単に「トルコ人打倒」を叫ぶだけでは不十分だった。支配の正当化の口実として「イスラム」が持ち出される可能性を断っておかねばならなかった。そのためには、「ムスリム」であることで自己の正当化を図っている人間のメッキをはがし、真のムスリムと偽のムスリムを見分ける試金石とすることができるような、新しい合言葉を見つける必要があった。支配者の「イスラム」と訣別し、民衆のイスラムを再確立することを可能にするためには、その合言葉はできるだけ衝撃的で、エジ

プト北部ナイル河谷ではむしろ異端視すらされているような種類のものである必要があった。無意識のうちにこういった模索が続く只中に、西南部の民衆との接触（象徴的にはカリフ・アブダッラーヒのナイル河谷到着）を契機にもたらされた言葉が、「マフディー」だったのだと筆者は考えたい。

「正導者」という概念はむしろ、イスラム世界では広く知られていた。しかし当時のエジプト～北部ナイル河谷ではそれがどちらかという上空想的で議論に値しないものと考えられつつあったことは、幾つかの例が示している⁹³⁾。それは19世紀においては、むしろ西アフリカのハウサランド～ボルヌーで活力を得ていた概念であった。そして活力あるマフディー観を持ったこれらの地の人々は、ちょうどカリフ・アブダッラーヒの祖父がそうであったように、巡礼兼マフディー捜しを兼ねて東へと旅立ち、結果的にはスーダン西部のダール・フルヤコルドフェーンに住みついて、これらの地に西アフリカのマフディー観を醸成していた⁹⁴⁾。

だが、北部ナイル河谷では突飛な概念だったからこそ、それは変革を前にした人間の試金石として機能することができた。それは人に先祖代々の「ムスリム」としてのアイデンティティーで自己を正当化させることを中止させ、「アンサール（＝マフディーの援助者）」としての新しい生を踏み出させるための合言葉だった。それと同時に、西部や南部の非ムスリム住民との、原則的共闘⁹⁵⁾を可能にする合言葉でもあった。「マフディー」概念を前にしては、ある人間が以前からムスリムであったかどうかはもはや問題にならなかった。人はマフディーを信じることでムスリムにな

92) Muḥammad Ibrāhīm Abū Salīm, *op. cit.*, pp. 310-316.

93) Jackson, *op. cit.*, p. 86; Ibrāhīm Fawzī, *op. cit.*, Vol. I, p. 75.

94) この点については Saburi Biobaku, Muhammad al-Hajj, "The Sudanese Mahdiyya and the Niger-Chad Region", *Islam in Tropical Africa* (ed. by I. M. Lewis), 1980; 'Umar al-Naqar, *The Pilgrimage Tradition in West Africa*, Khartoum, 1972 に詳しい。

95) マフディー運動の一特に初期における一西・南部の非ムスリム住民の参加については, Na'ūm Shuqayr, *op. cit.*, Vol. III, pp. 192-198 参照。

るのだった。マフディーを信じない者は、たとえ先祖代々のムスリムであっても真のムスリムではないとされた⁹⁶⁾。「お前たちは」とマフディーは、前述のユースフ・ハサン・アッ・シャッラーリーの手紙に「移住」先のヌバ山地から誇らかに答えている。「私の支持者はバッカーラと、無知な者たちと、偶像崇拜者たちだけだと言う。それなら知るがよい。私以前のもろもろの使徒の支持者たち、いや預言者ムハンマドの支持者たちも、みな無力で、無知で、遊牧民で、石や木を拜んでいたのだ⁹⁷⁾。

一言で言って、「マフディー」という概念は、「イスラム性」で自己を正当化しつつ「近代化」を押し進めて行くムハンマド・アリー朝の支配構造の真只中で、非ムスリムや遊牧民から分断され、統合の論理を見失っていた北部ナイル河谷民に、解放の契機をもたらしたのだった。そしてこの特殊な概念が他でもないバフル・アル・ガザール～南ダール・フルからもたらされることになったのは、決して偶然ではなかった。と言うよりむしろ、「マフディー」という西部的宗教概念が契機となってエジプト領スーダンが解放されることになるという事実は、1860年代後半～1870年代にバフル・アル・ガザール～南ダール・フルで成立した統合の論理と経験が、この時期にナイル河谷にもたらされたということ象徴しているにすぎないように思われる。バフル・アル・ガザールと南ダール・フルーイスラミック・フロンティアに成立したこの社会では、ムスリムと非ムスリム、Awlād al-Baladと遊牧民を共に包みこむ、結集と統合の論理が生み出されていた。その統合の論

理は、北部ナイル河谷を解放することになった。マフディー運動の中で西部民が果たした役割に関しては、「単に略奪・戦利品目あてで参加した」「カリフ・アブダッラーヒのもとで独裁制を敷いて Awlād al-Balad を支配し、マフディー運動を墮落・変質させた」といった否定的評価ばかりが多い⁹⁸⁾。だが西部（特にバフル・アル・ガザール～南ダール・フル）で成立した統合の論理と経験がナイル河谷にもたらされなければ、エジプト領スーダンの解放が達成され得なかったであろうことは明らかである。運動の展開の過程で、各地での政府側守備軍の投降の結果マフディー国家の下に入ることになった大量の元政府軍黒人兵士（ジハーディーヤ Jihādīya）の問題一つとってみても、ジャジーラやアル・ウバイイドの人々の中から彼らとの連帯・共闘の姿勢を期待することは到底できなかった⁹⁹⁾。黒人兵を同朋として扱い、黒人兵やヌバ山地住民の対マフディー国家反乱に寛容に対処することで結果的に運動に貢献することができたのは、彼自身ズバイルの Bāzinqir の一員だった、ハムダーン・アブー・アンジャのような人物だった。そして火器の扱いに習熟した大量の黒人兵士を味方につけることに成功したことが、物理的にはマフディー国家の存続を支えた。

ナイル河谷から出発したムハンマド・アリー朝の支配は、その周囲の人々を支配構造の中に取りこみ、他者との連帯の道を閉ざしていった。だが、その同じ支配の展開は他方で、バフル・アル・ガザール～南ダール・フルに独自の結集と統合を作り出すことになった。ムハンマド・アリー朝の支配の終点に成立したその社会は、そのままにしておかれればダ

96) *Ibid.*, p. 123.

97) Muḥammad Ibrāhīm Abū Salīm, *op. cit.*, p. 313.

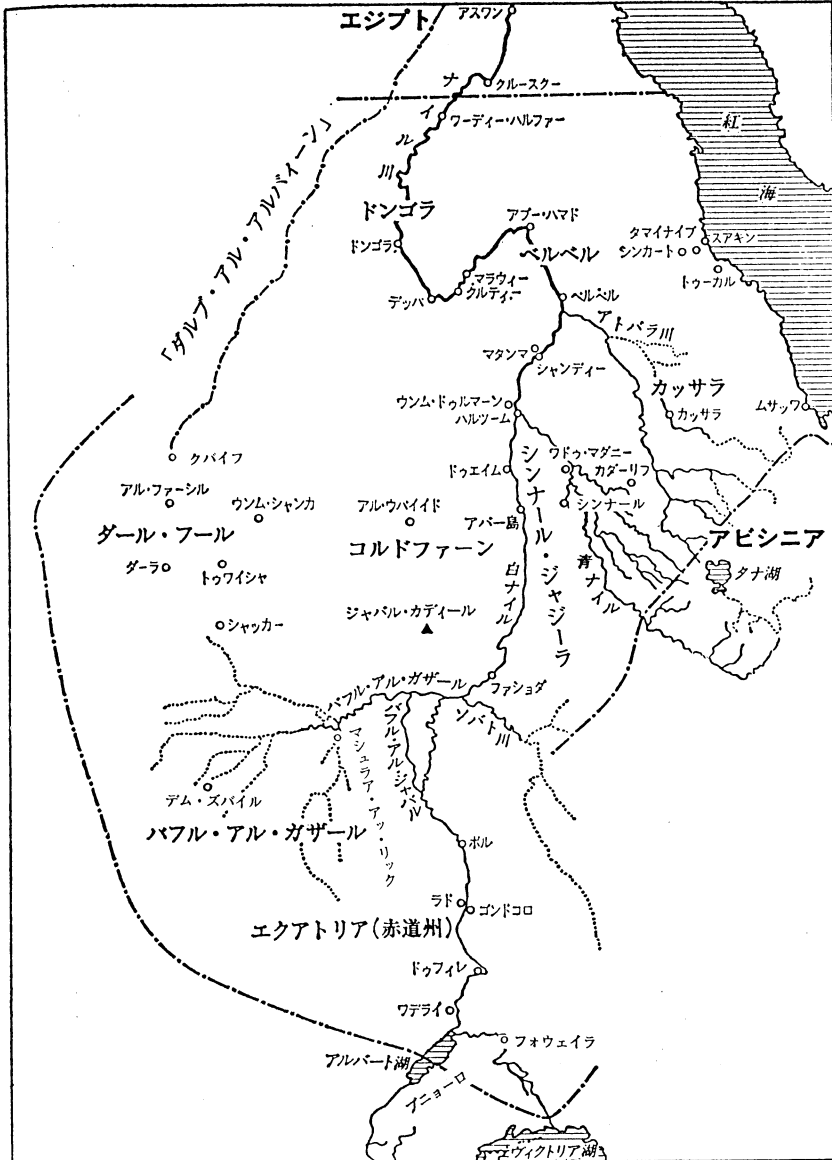
98) Holt, *The Mahdist State in the Sudan*, p. 134; 岡倉「スーダンにおけるマフディー運動とその意義」, p. 122, pp. 125-126.

99) ジハーディーヤ反乱が起きた時のアル・ウバイイド在住アンサールの非情な対応 (Slatin, *op. cit.*, p. 395), ジャジーラのアンサールの一人だったバービクル・バドリーの、黒人、ジハーディーヤに対する差別意識 (Babikr Badri, *op. cit.*, p. 117, p. 137, pp. 211-213).

ール・アル・クティのように独自の発展を続けるか、あるいはラービフの運動のように旧式の交易国家を解体しつつ拡大して行く方向に進んだかもしれなかった。だが、それに先立つ60年の支配の展開の当然の帰結として、ムハンマド・アリー朝はその支配を逃れて「奴隷交易」の中に身を隠した人々の最後の避難所とも言えるべきこの地域をも、直接支配下に取りこむことを選んだのだった。その行

為は成功したが、それは同時に、この地域に成立していた結集と統合の論理を、知らず知らずのうちに自己の領域内に持ちこんでしまうことをも意味したのだった。ムハンマド・アリー朝60年の支配の展開と対応しつつ複雑な過程を経てつくり上げられたこの統合の論理は、体制内にとりこまれたナイル河谷民の先鋭な意識・絶望感と結びついた時、その支配構造全体を内側から破砕することになる。

B図 エジプト領スーダン



『ハルツームのゴードン—同時代人の証言—』(リプロポート, 1983) 所収地図を原図として作成。